

# 青森県夏泊半島における生業の諸相とタビの受容

小林 亜希子

## はじめに

本稿では、青森県夏泊半島における生業の特質とその変遷過程をあきらかにした上で、それらの生業活動の具体例から、夏泊半島を中心とした、他地域との物・人両面の交流関係を捉える。

夏泊半島は青森県のほぼ中央に位置し、東、西、北の三方を陸奥湾に囲まれている。その陸奥湾の東側と北側には下北半島が、西側には津軽半島が位置する。行政区画としては、青森県平内町に属する。

調査期間は平成 13 年から 16 年まで、調査対象地は、夏泊半島沿岸部部落である浅所、東滝、白砂、東田沢、稲生、浦田、茂浦と、内陸部部落の野内畑である。さらに下北半島西通りの川内町（現むつ市）、脇野沢村（現むつ市）、津軽半島の平舘村（現外ヶ浜町）、富山県氷見市でも補充調査を行った<sup>1</sup>。

調査方法は聞き取り調査を主とし、その対象者はこれまで調査地で生活を営んできた人、もしくは調査地を生活の根拠地としながらも、出稼ぎなどにより他地域での生活を経験した人とした。

## 第 1 節 半島内の生業

明治期以降の夏泊半島沿岸部で行われてきた生業には、経済的依存度の大小を問題にしなければ漁業、農業、畜産業、林業（炭焼きも含む）、狩猟、採集が挙げられ、これら多様な生業の複合により生計が維持されてきた。なかでも地先漁業は生計の中心となる生業であったが、昭和 10 年前後から資源の減少などにより次第に衰退し、代わって他地域への出稼ぎが盛んになっていった。そして昭和 30 年代後半にホタテの養殖技術が開発され、それが数年の間に普及すると、その他の生業は次第に行われなくなったり、規模を縮小したりしていった。表 1<sup>2</sup>は、上記の生業それぞれの年代別変遷を示している。

### 1 漁業

夏泊半島沿岸部における漁業は、昭和初期まで、小型魚や貝類を対象とした各部落の地先における網漁や籠漁、突き漁などが中心であった。主要な地先漁業としては、ホタテの底曳き網漁、タラの底建て網漁、カレイなどの小型魚の刺し網漁があげられる。その多くは家族単位で行われる小型漁であった。しかし、家の労働力の不足を補うための、本分家などの親戚同士、あるいは近隣の家同士による共同関係も見られた。

昭和4、5年頃から、東田沢、稲生、浦田、茂浦の各部落に、富山県からイワシの大謀網をたてる親方が進出し、彼らの主導により地先における大型の集団漁が開始された。浅所、東滝、白砂においても部落内のクミと呼ばれる集団によってイワシの大謀網漁、あるいは建て網漁が行われるようになり、これらのクミには部落のほとんどの家が参加した。

昭和12、13年以降、次第にイワシ、タラ、ホタテといったそれまでの主要な漁獲物が不漁になっていき、地先漁業が衰退した。一方で、男性が他地域に出て行く出稼ぎが盛んになっていった。昭和30年頃までは下北半島や北海道などへの漁業の出稼ぎが盛んであったが、その後は北海道や関東地方への土木工事の出稼ぎが主となっていった。

昭和30年代後半に、浦田においてホタテ養殖の技術が開発された。昭和40年以降、漁業協同組合による奨励もあり、ホタテ養殖漁業を開始する家は急速に増加した。そして現在では、各部落のほとんどの家がホタテ養殖漁業を専業とするようになった。

表2<sup>3</sup>は、特に半島沿岸部に行われてきた漁法と、それらの漁法の年代による変遷を示している。

#### (1) 地先小型漁

##### ・刺し網漁

ほぼ年間を通して行われた漁であり、農業など他の生業の合間にも行われた。漁期によってカレイ、ヒラメ、アブラメ、カナガシラ、タイ、サバなど様々な魚を獲った。昭和初期までは、冬に刺し網でタラを獲っていた。その後より効率よく漁獲でき、タラが傷まない底建て網漁が下北半島脇野沢村の漁場から伝わり、タラの漁法は底建て網漁に切り替わった。この漁は家族のみで小規模に行われることが主であるが、家族の員数が足りないときなどは、本分家で組んだり、船を所有していない人に手伝いを頼んだりする場合もあった。

##### ・籠漁

籠を海中に設置し、一昼夜沈めておいてから引き上げ、ソイ、アブラメ、ツブなどを獲った。これは小規模の個人漁で、各家で他の漁や農業の合間などによく行った。籠は昭和40年頃まで、竹や木の皮や藁製で、各家で作成したものを使用していた。その後はナイロンやプラスチック製のものを青森市の資材屋などから購入している。

漁獲量は主に自家食分程度である。しかし冬期間にツブカゴでツブを獲り、それを煮て7、8個ずつ串に刺したものを売ることはよく行われていた。ツブを煮て串に刺す作業には女性や子どもも参加し、数軒の家の共同で行ったり、他家から手伝いを頼んだりしたこともあった。

##### ・突き漁

突き漁は、ソコミ、ヤストリ、ナギマミなどとも呼ばれる。ジャッピ、磯船などと呼ばれる小型船上から、ガラスバコ（箱メガネ）で海底を覗き、タモや、先が3本に分かれたヤスを使ってナマコ、ウニ、アワビなどを獲る。他の漁や、農業の合間の凧の日などによ

く行われた。この漁はたいてい2人1組で行う。その多くは夫婦であったが、まれに親子や兄弟で組む場合もあった。2人のうち、船を操る、漁の補助的な役割であるトモドリは、女性や若者が担うことが多かった。

#### ・底曳き網漁

昭和10年頃まで、底曳き網によって天然のホタテが獲られていた。当時は動力船がなかったためジャッピ、磯船などと呼ばれる帆掛け船で、網を付けたハッシャクという漁具を曳いて漁を行った。ホタテ貝は周期的に大量発生し、大島の沿岸には青森市街や青森市浅虫、下北半島川内町などから海産物加工業者が進出し、各部落のオオヤケ（裕福な家）も加工を手がけた。これらの業者や家は部落の人々に親方と呼ばれた。当時部落の人々は、船や網などの資材を親方から借りて漁を行い、その代わり漁獲物を親方に納め、利益の一部を報酬として受け取った。利益の分配は「四分六分」で、親方が6割、乗組員が4割であった。

昭和2、3年にホタテが豊漁になると、部落内の親方や本家などのオオヤケの中に、発動機船を使用する家が増えた。しかし発動機船による漁は、漁獲量がけた違いで、海底も荒らすので、各部落において、発動機船での漁獲をめぐって部落を二分するような争いが起こった。

その後、ホタテの漁獲量は徐々に減っていき、発動機船による底曳き網漁は禁止された。しかし昭和30年代まで、発動機船による底曳き網で、密かに様々な魚貝類を獲る人もいた。

#### ・地曳き網漁

白砂の地先は、浜が広く岩も少ないため、昭和40年頃まで地曳き網漁が行われていた。春にはコウナゴ、夏から秋にかけてはイワシが主に獲れた。自家だけで行うこともあったが、他家と協力して行うこともあった。イワシは獲った後すぐに浜で釜茹でし、それを干して煮干にしたものを、浅所の業者に売った。

#### ・採取

テングサ、モズク、フノリ、ワカメなどの海藻を、海中に腰まで浸かって採取した。これは主に女性の仕事で、冬の農閑期によく行われた。採った海草は主に自家食用であったが、乾燥させて他所に売りに行くこともあった。

浦田、茂浦では、昭和30年頃まで、婦人会の会員が共同でフノリを採り、それを青森市の問屋に売っていた。そのお金で会を運営したり、婦人会の集会所である小屋を買ったりした。

### （2）地先大型漁

#### ・建て網・大謀網漁

昭和4、5年頃、イワシの漁獲のため、東田沢、稲生、浦田、茂浦のそれぞれの部落に

富山県から数人の船頭を連れた親方が進出し、大謀網（大型定置網）を設置した。これらの親方と船頭たちは「富山の親方衆」、「タビから来た親方」などと呼ばれ、その卓越した漁撈技術は部落の人々の尊敬を集めた。

富山の親方衆は番屋という小屋を建てて、5月から10月までの漁期の間そこで寝泊りしながら漁を行った。部落の人々は親方に雇われ、ブカタ、ワケエモン、ヤトイなどと呼ばれる雇われ人として漁に参加した。1つの網に10人から15人のブカタが雇われ、漁は5、6艘の船に分乗して行った。儲けの分配は現金で、「四分六分」といって親方が6割を取り、残りの4割を漁に参加した人数で割って分配した。ただし船頭は二人前、機関長は一人前半、まだ一人前と認められない経験の浅い若者などは半人前と、ブカタの中にも明確な格付けがあった。大漁になると現金以外にイワシをそのままもらうこともあったが、これを焼き干しにした場合は、そのうち2割を親方に返上した。これをヤキモドシという。また、その年の漁を終えることを切り上げといい、その際にも若干のお金をもらった。獲ったイワシは焼き干しにしたり、煮詰めて干しカシ（肥料）にするなどの加工をしたりした上で、船で青森市の問屋に運んだ。以下は各部落の事例である。

【稲生】昭和7、8年頃まで、富山県から来た親方がイワシの大謀網漁を仕切っていた。その後部落内で、3軒の家が大謀網漁の網をたてた。うち2軒は1軒につき2つの網をたて、もう1軒は青森市造道の伊藤という親方と共同で1つの網をたてていた。この3軒は、それぞれ親方と呼ばれ、本家であり、オオヤケと呼ばれるような金持ちの家であった。当時、稲生で発動機船を持っているのは、この3軒だけだった。これらの親方は、大謀網漁だけでなく、建て網漁や刺し網漁も行った。船頭やブカタはいずれも稲生の人であったが、漁の間は浜に番屋を建ててそこで寝泊りした。このような漁は戦時中まで続いた。

【浦田】昭和4、5年頃から10年頃まで、春から秋にかけて、富山県から来た親方が浦田の地先で大謀網をたてて、イワシを獲っていた。親方は「できた人」で、漁の技術に優れており、金持ちであった。彼らは部落の者に金を貸したり酒を振舞ったりしてくれる、人好きのする人であった。しかし彼らはタビから来た人であったので、部落の者たちは最初、言葉がわからず苦労した。富山の親方が来なくなったのは、次第にイワシの漁獲量が減り、儲からなくなったためである。イワシの不漁で破産した親方もあったため、「流れものは間違うとメシの食い上げだ」などと言った。

その後、部落内のクミによる小規模の定置網漁が行われた。昭和35、36年頃には、北海道出身の小塚栄という人が、定置網漁の親方を務めた。その後、部落内の者が、網などの漁具と人夫を、当時のお金で50万円で買取り、親方を務めた。

【茂浦】昭和5年頃から12、13年頃まで、富山県から来た島崎という親方がイワシの大謀網漁を仕切っていた。部落内の多くの中は、ブカタ、ヤトイと呼ばれる雇われ人として漁に参加した。部落外からも漁に参加する者がおり、それらは主に茂浦にマキがいる人などであった。カロゴなどを持っている裕福な家からは、漁に参加する人数が多く、番屋

を建てて親方らを迎えることもした。こうした裕福な家をオオヤケと呼んだ。漁に際しては、オカアミ、オキアミの2つのクミに分かれた。両者は網をたてる場所が違った。参加する人のクミ分けは特に決まっておらず、その時によってクジで決めた。

富山の親方が来なくなったのは、遠くから出漁して来ることに對し、採算が合わなくなったからである。イワシは大漁とそうでないときの落差が激しく、当時の網はワラ網で腐りやすかったので、1年で作り直さなければならず、お金がかかった。

茂浦では戦前まで、部落内の親方の主導による漁も行われていた。親方は、茂浦・浦田から20人以上のヤトイを雇って、その中から経験豊富な者を船頭としていた。イワシは主にカシと呼ばれる肥料に加工され、青森市に運ばれた。イワシの加工作業には部落内の女性が雇われた。昭和3年生まれの女性は、イワシを大きな釜で煮て搾り、ムシロで干す仕事を行っていた。

その後、浅所、東滝、白砂においても青森市の魚問屋などの投資を受けて、部落内の親方を中心とする、あるいはクミと呼ばれる部落内の集団による、イワシの大謀網漁、建て網漁が開始された。稲生、浦田、茂浦でも昭和10年前後に、富山の親方衆がイワシの不漁のため来なくなると、部落内のオオヤケが大謀網をたてる親方として経営を始めた。いずれも富山の親方衆と比べると小規模ではあったが、儲けの分け前が五分五分であったこともあり、部落内外から多くの人が参加した。

【浅所】昭和7、8年から数年間、イワシの大謀網漁と建て網漁が行われていた。漁はクミと呼ばれる集団で行われた。現雷電林、福館の方をカミ、現浅所の方をシモと呼び、カミで2組、シモで1組のクミがあった。ほとんどの家がクミに参加していたが、特に親方とされる家はなく、各家で網をたてる資金や人手を出し合って、共同で漁を行っていた。

【東滝】昭和7、8年から14、15年頃まで、イワシの建て網漁と大謀網漁が行われていた。これらの漁はクミと呼ばれる集団で行われていた。大謀網漁を行う大きなクミが、滝と間木で1つずつあり、滝がカミ、間木がシモのクミと呼ばれた。このクミにはそれぞれ滝と間木のほとんどの家が参加していた。「クミに入らなければ銭入らない」と言われ、部落内で漁をするとき、クミに入っていることは不可欠であった。これらのクミには、白砂や浅所から来て参加している人もいた。クミの中で、網や船を持つ家が主導的な役割を果たしており、それらの家は親方と呼ばれた。滝のクミの親方は、本家であり、オオヤケと呼ばれるような金持ちの家であった。

その他、数家族単位の小さなクミで、建て網漁が行われていた。これらは、マキと呼ばれる親戚同士で組まれることが多かった。

【白砂】部落内の、網などの漁具や船を所有している裕福な家が親方となり、大謀網漁を仕切っていた。これは昭和30年頃まで続けられ、イワシ以外にサバ、アジも獲った。ブカタは部落内だけでなく、東滝や東田沢からも来ており、人手が足りない場合は親方が親戚をテツダイとして呼んで来ることもあった。分け前は親方6分、ブカタ4分であった

が、テツダイの人は5分くらいもらっていた。

#### ・底建て網漁

タラは、昭和初期までは刺し網で獲られていた。しかし、下北半島脇野沢村から底建網の技術が伝わり、タラが傷みにくいなどの理由からこちらの漁法が広まった。

4、5軒の家の共同で行われ、本分家やオヤコマキで組むことが多かった。たいていは本家が船や網を所有しており、分家の人間は本家に頼まれて船に乗り、漁を手伝って分け前をもらった。分け前は本家が半分を取り、漁に参加した分家が残りの半分を平等に分けた。分家は本家に逆らっては漁に参加できないため、本家の力が非常に強かった。

タラ漁の漁期は11月末から1月末までであった。11月29日のタラ開けの日には、合図とともに一斉に網をたてる場所を目指して船を出すバトリが行われた。バトリの争いは激しく、海上で喧嘩になったり、相手の船を故障させたりすることもあった。大正8年生まれの男性は、獲ったタラをそのまま船で青森市に運ぶか、乾燥させてから売った。

### (3) 地先外での漁

#### ・突き漁

戦前には部落ごとの地先の境界が曖昧で、またソコミはどこで行っても自由という慣習があったため、自分の部落の地先以外でソコミを行う者も多かった。夜明け前に一人で磯船に乗り、浦田から東田沢の方までも出掛けて行ったと言う人や、稲生から白砂まで行った人もいた。東滝、白砂、東田沢から平舘村、下北半島川内町、脇野沢村の地先に行く場合もあった。また土屋、浪打から稲生や東田沢の地先にソコミに来る人もあった。

#### ・釣り漁

東田沢の大正12年生まれの男性は、戦前、夏の1ヶ月間、帆掛け船で下北半島川内町の地先まで行き、スズキ、タイなどを釣った。夜は浜に船を着けて寝た。釣った魚はむつ市大湊の魚屋に直接持ち込んで売った。

#### ・底曳き網漁

浅所の大正3年生まれの男性は、16、17歳の頃に、日帰りでむつ市大湊に行き、底曳き網でホタテを獲っていた。底曳き網によるホタテ漁はホタテフキと呼ばれた。ホタテ漁は5月に解禁され、海が凪いでいれば、毎日でも大湊に行った。当時、部落から大湊に漁に行く船は多く、いずれも青森市相馬町（現港町付近）から来た発動機船にロープで引いてもらって漁場に行った。発動船1艘に対し、4人乗りの船を約20艘引いてもらった。4人乗りの船には、船と漁具を所有している船頭と、船頭の親戚や近所の人が3人乗っていた。

### (4) 養殖

#### ・ノリの養殖

昭和 33 年頃から、浅所の松島付近においてノリの養殖が試みられた。最初の年は、数軒の家が津軽半島平館村から購入したシセツ（道具の一種）を浅瀬に設置して開始し、成功した。しかしその後、多くの家が養殖を始めるとノリの付きが悪くなり、また手間がかかる割に収入が少ないといった理由で、数年で全ての家が養殖を断念した。

#### ・カキの養殖

浅所、東滝、東和では、ホタテの養殖が始まる以前に、4、5 年間カキの養殖が行われていた。当時は、現在のホタテ養殖のようにシセツが頑丈でなかったために、よくヤマセで壊された。カキのタネは宮城県気仙沼市から買ってきていた。

#### ・ホタテの養殖

浦田において、初めてホタテの養殖漁業が開始されたのは昭和 38 年頃である。網、縄などの漁具の素材に、それまでの藁、木綿、麻、テグス製に代わって腐りにくいナイロンが登場したことで、常時海中に沈めておく養殖施設が可能になった。ナイロン製の網は北海道に出稼ぎに行っていた人が持ち帰ったといわれる。稚貝を付着させる網も、当初の杉の葉から北海道のサケ網を使用するようになって、養殖が容易になった。

当初は設備が高価であったため、数軒の家が小規模に行っていただけであった。しかし、昭和 42、43 年頃からの漁業協同組合の奨励、資金援助もあって、数年で夏泊半島沿岸部部落のほとんどの家が、ホタテ養殖漁業に転向した。

ホタテ養殖の技術が開発された当時、各部落では多くの家の男性が出稼ぎに出て生計を立てていた。そうした人たちを部落に呼び戻し、地先におけるホタテ養殖漁業を普及させるため、昭和 42 年頃から漁業協同組合により様々な施策がなされた。養殖用施設や当面の生活費などを各家に貸し与え、出稼ぎに行っていた人がホタテ養殖漁業に転向しやすい環境を整えた。また、船を所有していない人や、船があっても船外機がない人には、船や船外機を買う資金も貸し与えた。これらの借金はホタテの養殖で儲けた金で返済していきえるようにした。

ホタテ養殖漁業は数年で夏泊半島の沿岸部部落に普及し、ほとんどの家がホタテ養殖漁業に転向した。養殖が軌道に乗った昭和 45 年頃には、ホタテ養殖で稼いだ金で、新築される家も見られた。それらの家は「ホタテ御殿」と呼ばれた。船もそれまでの木造船から、プラスチック製のディーゼル船へ転換する家が急増した。

ホタテ養殖漁業には年間を通してさまざまな作業がある。こうした作業の手順や方法は、養殖の開始以降多くの改良を経てきた。より効率的に、より多い漁獲を得るための工夫やこころみは個人によって実行され、その中で成功したものが部落全体の知識として共有されていった。このような試行錯誤の中でホタテ養殖は専門化がすすみ、他の生業との兼業は難しくなり、他の漁業や稲作などを行う家は急速に減少した。

また、ホタテ養殖の作業はたいてい家族内の労働力で賄われ、他家との共同はほとんど見られなくなった。そのため、それまでは田畑の仕事や網の修繕といったオカ仕事为主で、

海に出ることの少なかった女性も、ホタテ養殖漁業においては重要な労働力として日常的に船に乗り、作業を担うようになった。

原因は分からないが、数年に一度ホタテの稚貝が全滅してしまうことがある。そのような時は、他地域から稚貝を分けてもらう。平成 15 年には、清水川方面でホタテの稚貝が全滅したため、浦田の人にその部落の人が、個人的に稚貝を分けてもらいにきた。このような場合は、お金を取らずに分けてやる。

## 2 農業

### (1) 稲作

稲作は、昭和 40 年代までは多くの家で行われていた。浅所では、隣部落の東和、福館にいたる間の場所に田を所有している家が多かった。田を所有しない家の女性も、小湊や福館など、近隣の部落に田仕事のテーマとりに行き、米か金をもらうということが一般的であった。東滝・間木は農地が少なく、田を所有しているのはオオヤケだけであった。白砂は後背の山地に開墾した田地が多くあり、田を所有していない家は少なかった。東田沢は野内畑に至るまでの山地に広範な田地を持っていたが、一方で田を所有していない漁業主体の家も多かった。稲生は田地が少なく、田を所有している家も少なかった。いずれもオオヤケや本家が田を所有していることが多かった。「田を持っていればオオヤケ」というように、経済的には漁業で生計を立てている家であっても「財産」としての田の所有への意欲は大きく、田を持つ、購入することは家の財の象徴として大きな意味があった。

田仕事は基本的に家族単位で行われるが、昭和 30 年代以降、農作業が機械化するまでは、田植えや稲刈りは親戚、本分家の共同で行われていた。普段の作業においても、漁業などとの兼業により人手が足りない場合は、テーマとりという日雇いの労働者を雇ったり、カロゴという農村部から連れて来た住み込みの使用人を使ったりした。

その後ホタテ養殖漁業が軌道に乗り、政府の減反政策が始まったことにより、稲作を行う家は急速に減少した。現在では多くの田が休耕田となるか、部落外の人に貸されている。

### (2) 畑作

畑地は、各部落でほとんどの家が家の裏や山の斜面を開墾した場所などのわずかな土地に所有しており、昭和 40 年代までは、たいていのものが自給で済ませられるほど種類豊富な野菜を作っていた。茂浦ではタバコ、椎茸などの商品作物を栽培していた例もある。野菜の収穫量は自家食分程度であったが、特にハウレンソウなどの葉ものの野菜は青森市などに売りに行くこともあった。畑仕事は、主に女性の仕事であった。昭和 30 年代に化学肥料が登場するまでは、家畜の糞から堆肥を作ったり、貝殻やヒトデを乾燥させて砕いたものを肥料としたりしていた。



現在でも、その規模こそ減少しているものの、畑で野菜などを作っている家は多い。しかし収穫量はいずれも自家食分程度であり、他所に売りに行くことはない。普段の作業には女性や年寄りがあたることが多い。

### （３）家畜

#### ・牛馬

昭和 30 年代後半までは、田を所有する家の多くが農耕用に馬や牛を飼っていた。また、牛馬の糞を畑の堆肥にしたり、漁獲物や炭の運搬に馬車を使用したりもした。

小湊では、年に 1 度春にマイチ（馬市）が開かれ、馬セリで馬が売り買いされていた。夏泊半島の各部落では、農耕馬として飼育するだけでなく、馬に種つけして子馬を産ませ、それを 2 年ほど育ててからマイチに出して売る家もあった。馬の種つけや、年をとった馬の交換、馬を所有していない家への馬の貸し出しを行うバクロウが浅所や小湊におり、各部落を回って商売をしていた。また、馬の種つけを行う業者が小湊や藤沢にいた。

浅所ではオオヤケは馬や牛を飼っており、田を耕すために使っていた。オオヤケは、馬や牛を親戚以外には貸しはがらなかった。また、漁で獲った魚を馬車で売りに行く人もいた。馬車で行くときは遠くには行かず、売る量も少なかった。馬はマイチで買ってきたが、藤沢から種馬を持って来て自分の馬に子を産ませる人もいた。昭和 35、36 年から耕運機が普及し始め、馬や牛を飼う家は次第になくなった。

東滝では田おこしの季節になると、親戚 3 軒くらいで一緒にバクロウから馬を借りた。借り賃は 1、2 週間ほどで、20 円であった。借りた馬に、サンボンカという先が三又に分かれたクワのようなものを曳かせて、田を掻いた。田を掻く作業は 3 回繰り返し、それぞれの作業をアラグレ、ナカガキ、シロといった。こうした田おこしをサセドリといい、この仕事は女性や子どもの仕事として、他家から人を雇っておこなわれることもあった。田おこしの季節に他部落の農家に毎年雇われて行き、泊まりがけでサセドリをする子どももいた。

#### ・豚

豚は昭和 30 年代まで、特に東海岸の部落において、多くの家が飼育していた。小湊で買ったり、繁殖をしている家から譲り受けたりした。子豚を半年ほど育て、小湊の肉屋に売った。餌は残飯などを与えておけばよく、経済的であったので、主婦の小遣い稼ぎとして豚の飼育が盛んであった。小湊の肉屋は豚の重量で値段を決めた。豚の糞は畑の堆肥としても利用された。浅所の大正 12 年生まれの女性は、部落内の、豚を飼育し種つけさせていた家から子豚を買って育てていた。ザッパと呼ばれる残飯や米糠を食べさせて 6 ヶ月くらい育て、豚買いに売った。

### 3 林業・狩猟

#### (1) 炭焼き

炭焼きは、東田沢、稲生、浦田、茂浦において明治時代から行われ、昭和初期から昭和30年代にかけて全盛期を迎えた。特に戦時中は石炭、石油などの化石燃料が軍事用に徴用されてしまったので、家庭における主要な燃料として炭・薪は非常に重用された。

野内畑周辺の山林はワダカンという会社の所有地であり、多くの家はワダカンにヤキコとして雇われて炭焼きを行っていた。やはり冬期に盛んに行われ、野内畑には炭焼きを専業とする家もあったが、農閑期にヤキコとなって炭焼きを行う家の方が多かった。東田沢からも、漁業の副業としてヤキコになる者が多かった。ヤキコは主に男性であったが、炭の運搬や木材の搬入には女性も参加した。昭和8年生まれの女性は、野内畑に炭焼きに行き、炭の運搬を行っていた。

稲生、浦田、茂浦では、部落で国有林を払い下げてもらい、それを各家に分配して、家ごとに炭焼きを行うことが多かった。山を持っているオオヤケが、ヤキコを雇って炭を焼かせることもあった。炭が出来ると、ショイコと呼ばれる、物を担いで運ぶ人を頼み、山から部落まで炭を運んでもらう。部落からはカジキザオ（モッコ）などで運搬船に積み込み、青森市まで運んだ。

炭窯づくりは、親戚など何軒かの家で、共同で行ったが、炭焼きはたいてい家族単位で作業を行い、女性や子どもも仕事を担った。

#### (2) 薪

昭和30年代後半までは薪ストーブが一般的であったため毎年大量の薪が必要であった。しかし各部落の後背に広がる山林はそのほとんどが国有林であり、部落では国有林の払い下げ制度により、毎年国有林の一部の使用権を払い下げてもらい、それを家ごとに分配した。この分配作業を山割りと呼び、秋の沖休みの日に、各家からひとりずつが参加して行われるものだった。おおよそ同じくらいの本数になるように境界線が引かれた。しかし部落からの距離や木の質により良い場所と悪い場所ができるので、各家に割り当てられる場所はクジ引きによって決められた。木を切る作業は、漁や田畑の仕事が暇で、雪により運搬が容易となる冬に行われることが多かった。薪の運搬には女性も参加した。

浅所では、払い下げられた国有林は、毎年秋に部落内の人びとによって均等の広さに分けられ、それが各家に割り当てられた。このような作業を山割りといった。各家にあたる場所を決める方法はくじ引きであった。割り当てられた場所の広さはどこの家でも同じだが、生えている木の太さや本数に違いがあった。

#### (3) コンビキ

コンビキとは、山から切り出してきた材木を用途に合わせて板材や角材などに加工する仕事や、それをする者のことである。特に船をハグ（造る）際には、船の形に合わせてさまざまな形の船材が必要であり、船大工や船主に頼まれると泊りがけで出掛けて行ってコンビキをした。コンビキは直接木を切る仕事はせず、そういった仕事をする人はヤマッコと呼ばれていた。茂浦の大正5年生まれの男性は、父親がコンビキをしていたので、小学校を卒業すると父や兄たちについてコンビキの仕事を覚えた。コンビキの仕事は2、3人で組んで行うものだった。最初のうちは父親と、後には兄たちと行った。津軽半島の今別町や平館村の山の親方に頼まれて、数ヶ月も小屋をかけて山に泊まって仕事をしたこともあった。平館村は豊富な木材と高い加工技術を背景とする造船業が盛んで、夏泊半島からも船を注文する人が多く、また夏泊半島の船大工が若いときに平館村へ修業に行くこともあった。

#### （4）狩猟

狩猟を専業とする人はいなかったが、罟を仕掛けて山の動物を捕ることは昭和50年代まで行われていた。

針金で罟を作り、ウサギを捕って毛皮を取ったり、肉を煮て食べたりした。戦前には、家の中で肉を食べることを嫌う家もあり、そのような場合は作業小屋や屋外で肉を調理して食べた。ウサギの臓物などを餌に、トラバサミという罟を仕掛け、イタチ、タヌキ、テン、狐などを捕った。トラバサミは小湊や青森市の金物屋で購入した。捕った動物から毛皮を取り、藤沢、小湊から毛皮を買いに来た仲買人に売った。これらのことは、畑仕事や炭焼きなどで山に入ったついでに行ったり、子どもが小遣い稼ぎで行ったりしたものであり、これで生計を立てる人はいなかった。

表3-1は、これまで挙げてきた生業の一年間の生業暦を示したものである。

## 第2節 タビとの関わり

夏泊半島において、タビという語は大別して2つの意味で使用されている。ひとつは、他地域、特に日常的な生活圏の外の地域といった意味である。この場合のタビは、夏泊半島の住民の共通認識として特定の範囲を示しうるようなものではなく、この語を使用する個人の経験や認識、あるいは使用する際の文脈によって、その範囲には偏りや伸縮が見られる。もうひとつは、遠方の地に行く出稼ぎ、行商などの生業活動そのものを指す場合である。

本節では、交易や出稼ぎといった、部落や半島を越えて行われる人・物両面での交流について記述する。

### 1 交通・交易

## （１）交通

### ・陸上交通

半島の付け根部にある小湊は、明治 24 年に東北本線の駅が設置され、半島東海岸の部落にとって身近なマチとして発達した。また昭和 14 年には小豆沢に西平内駅が開駅し、半島西海岸の部落の人が青森市浅虫、青森市街といった町場へ出掛ける際の中継地となった。

しかし、半島沿岸部を結ぶ道路網が整備されたのは戦後になってからのことである。戦前には、東海岸の、浅所から東田沢までをつなぐ道路は未整備であり、陸上における物資や人の移動は、専ら馬車か徒歩に限られていた。また、西海岸の茂浦―浦田―稲生間は、峠や海岸線を通る難所として知られ、徒歩で通るのがやっとな上に、冬期や悪天候の際には通行不能になることもしばしばであった。

昭和 24 年に、西平内から茂浦までの道路が整備され、西平内駅への通行が容易になった。その後、浅所から東田沢まで、半島東海岸の部落を結ぶ道路も整備された。そして昭和 33 年には、茂浦から稲生までの道路が整備され、開通した。

昭和 29 年、民営のバスが青森駅から浅所まわりで東田沢までと、青森駅から茂浦までの 2 つの路線を走るようになった。昭和 30 年代後半には、小湊から東田沢、茂浦、青森市をつなぐ路線が整った。

道路の整備が進み始めた昭和 24 年頃から、夏泊半島の部落内でも、自転車、スクーター、オートバイ、バイクを所有する人が現れ、行商や漁獲物運搬用のトラック、ライトバンも見られるようになった。ホタテ養殖漁業が始まった昭和 40 年すぎからは、自家用車を所有する家も急増した。

### ・海上交通

前述のように、半島内あるいは半島と外部を結ぶ陸上の交通網が整備されたのは、戦後になってからのことである。しかしそれ以前、半島内の生活圏が閉じたものだった訳ではない。夏泊半島は、海を通じての他地域との交流を可能にしていた。

戦前から、漁獲物やその加工物が、船で直接青森市の間屋に運ばれることがよく見られた。各部落から小湊や青森市に買い物などに出る際も、船の方が便の良い場合もあった。茂浦―浦田間や、浦田―稲生間は、部落同士を結ぶ道路が険しく、隣の部落であっても、行き来は船を利用した方が容易である場合もあった。

無動力の帆掛け船でも、青森市まで漁獲物を運んだり、下北半島の方まで漁に出掛けたりすることは可能であった。さらに、昭和初期に各部落に発動機船が普及してからは、船での他地域との行き来はより活発になった。

下北半島や北海道への漁業の出稼ぎ行く場合、その交通手段は主に船であり、出稼ぎ先から迎えに来た大型船に、部落から多くの人が乗り込んだ。

戦前には、北海道や樺太（現サハリン）から青森市、小湊へと、漁獲物の運搬を行う船があり、浅所や東田沢ではこうした船に乗って働く者もいた。

また昭和 30 年頃まで、東田沢や浦田には、運搬専門の船があった。これらの船は、主に浦田、稲生、東田沢、茂浦などの部落を経由し、それぞれの部落で載せた漁獲物や炭、または人を青森市へと運んでいた。東田沢の田中酒店が所有していた運搬専門の木造船は、ショイコ（ここでは運び屋の意）に頼んで山から下ろした炭を積んで、青森市内の堤橋まで入って行った。浦田には連絡船と呼ばれる大栄丸、茂浦丸という名前の船があり、大栄丸は浦田の人が所有し、茂浦丸は茂浦の人が所有していて浦田の人が雇われて動かしていた。これらの船は、漁に使う船より大きく、大きな船を所有していない人から頼まれて、魚や炭や野菜を主に青森市まで運んだ。また、物資だけでなく青森市の病院に行く人や買い物に行く人も乗せた。船は浦田だけでなく、依頼に応じて茂浦、稲生など他の部落にも行った。運賃は荷物の量により決められ、普通は何軒かが一緒に荷物を運んでもらった。

#### （1）交易

・他所へ行く交換・売買・行商など

##### 食料交換

特に戦中、戦後の数年間、物資が不足していたため、部落でとった漁獲物や塩などを他所へ持って行き、主に米などと交換してくることが盛んに行われていた。このことをヤミショイといい、これを行う人のことをショイコ、カツギ屋などといった。

その後、他所での交換に代わって、売買、行商が一般的になったが、家で栽培した大豆を店に持って行き、醤油や味噌と交換するといったことは、昭和 30 年代まで行われていた。

浅所の大正 6 年生まれの男性は、戦中から戦後にかけて塩が不足していたため、海水を釜で煮詰めて塩を作り、米と交換していた。青森市のザイ（いなか）の麴屋に塩を持って行くと、塩 1 枡を米 2 升と取り換えてくれた。またこの男性とその妻は、終戦後しばらくの間、刺し網やソコミで獲った魚貝類や、ホヤムシ（ヒトデ）や貝殻などを乾燥させて砕いた田畑の肥料を、青森市や清水川、松野木、あるいは三沢市古間木などの南部地方の農家に持って行き、米と交換していた。魚貝類では、特にホヤが高く引き取ってもらえた。西平内駅までは歩き、そこから汽車で目的地に行った。これは主に女性の仕事であった。魚を入れる、一斗缶と同じくらいの大きさの金属の箱をガンカンといい、それを背負って売り歩く女性をガンガッコと呼んだ。

##### 売買

昭和 30 年代まで、各家でとった漁獲物やその加工品、野菜などを、個人で他所に売りに行くことが一般的に行われていた。行き先としては青森市街、青森市浅虫などが多く、その決まった魚屋や問屋に直接持ち込むことで、部落に来る仲買人に売るより高値で売ることができた。当時は車が普及しておらず、道路も未整備であったため、馬車を使ったり、売り物を背負って徒歩や汽車で売りに行ったりすることが多かった。売り物を背負って他所へ売りに行く人たちのことを、ショイコ、カツギ屋とも言った。

東田沢では戦後まもなくの頃、ヒトデなどを干して肥料にしたものを作っていた。これは馬車で小湊の業者のもとに運ばれ、弘前市方面の農家に売られた。当時、この肥料が非常によく売れたため、部落内は景気がよく、子どもでも 100 円札を持っているほどであった。明治 44 年生まれの女性の夫が、大阪に行って買い付けてきた服などが、2、3 日で売り切れたほどであった。

#### 行商

昭和 30 年代まで、各家でとった漁獲物やその加工品、野菜などを、特に売り先を定めずに個人で他所へ売り歩く行商が、一般的に行われていた。行商に行くのは主に女性であり、徒歩で近隣の部落へ行ったり、汽車で青森市などに行ったりと、行き先はさまざまであった。行商に行く人は、それぞれの得意先や、高く売るためのコツを持っていた。

茂浦では昭和 30 年代まで、主婦が、自家の畑で採れたホウレンソウなどの野菜や、自分で採って来た山菜やキノコを塩づけにしたものを、青森市まで持って行って仲買人や問屋に売ることがよく行われていた。夏泊半島の西側はニシカゼが強いため、野菜や山菜が他の地域より早くできる。そのため早く青森市へ売りに行くと、通常より高い値段で売ることができた。山菜は誰の山から採っても構わなかった。行商で儲けた金の一部は、ホマヅ（ヘソクリ、小遣い）として女性の自由になる場合もあったので、青森市で子どもの服や食料品を買うこともあった。

また商店の行商活動もあった。東田沢の鹿内商店は、知り合いの漁師に船を出してもらい、昭和 25 年頃から昭和 55 年頃まで下北半島に衣類を売りに行っていた。下北半島の脇野沢村蛸田に前店主の妻の兄が住んでいたもので、その家を拠点にして同村の小沢、脇野沢、源藤城、九艘泊、川内町蛸崎に行った。1 つの部落に 1 日ずつ滞在して衣類を売り、その部落に泊めてもらって次の部落へと行った。終戦後すぐは物価が高かったのでもいいお金になった。車を買ってからは、船よりも車のほうが便利だからという理由で、車で売りに行くようになった。車で行くようになると蛸崎に知り合いの船大工がいたので、そこを拠点にして他の部落に行くようになった。

茂浦の森商店は昭和 40 年頃まで、浦田・稲生に布と和服、洋服や、下駄・地下足袋などの履き物の行商に出掛けていた。茂浦から浦田・稲生までの道路が整備されるまでは、浦田までは峠を越える細い道を通り、浦田から稲生までは海岸沿いの岩を伝って歩いた。

#### ・他所から来る人

#### 漁業経営者

昭和 4、5 年頃、富山県から東田沢、稲生、浦田、茂浦の各部落に、イワシの大謀網をたてる親方と、親方に付いて来た船頭や若い衆が進出して来た。親方は米や金、着物などを貸してくれるなど、漁だけでなく生活全般にわたってブカタの面倒を見ていた。彼らは漁期の間番屋で寝泊りし、漁期が終わると帰って行った。何年も続けて来る人はいたが、

そのまま部落に住みつくことはなかった。若い衆が茂浦の女性とスキツレになることがあったが、2人とも違う土地に行ってしまったという。

東田沢に来た親方は青柳、茂浦に来た親方が島崎という姓であり、かつて東田沢に船頭として来て野辺地町で薬屋になった四十物という姓の人がいることくらいしか、富山県に関して残っている情報がなく、また文献資料もないことから夏泊半島と富山県との関わりを具体的に探ることは現時点では困難である。ただ富山県氷見市や新湊市からは、多くの漁業経営者が秋田県や下北半島、北海道に進出しているため、夏泊半島（平内町）への出漁も同地域からではないかと推察される。また青柳という姓が氷見市では見かけられないこと、四十物という姓が新湊市に存在するということから、新湊市からの出漁者であった可能性が高いといえる。

#### 人夫・鉦夫

浅所には戦時中、小湊港の建設のため、工事に携わっていた多くの人夫が浅所に居住していた。人夫の多くは北海道や秋田県など遠方から来ていた。

茂浦の大正5年生まれの男性の家は商店を営んでいて、家屋が大きかったことから、よくタビから来た人を泊めた。戦時中、秋田県尾去沢から鉦夫が大勢来て茂浦、浦田周辺の山を採掘していた。彼らは山の中に小屋をかけて泊まっていたが、増子という名の親方だけは男性の家に泊まっていた。

#### 行商人

昭和30年代まで、他所から食料品や日用品などを売りに来る人や、日用品の修理に来る人が多くいた。昭和20年代までは、交通が不便であったこともあり、徒歩や馬車で来る人がほとんどであった。遠方から布を売りに来る行商人は、「タビのタベト」などとも呼ばれた。その後道路が整備されてからは、遠方から車で来る人も増えた。いずれも、同じ人が定期的に来る場合が多かったが、1度しか来ない行商人の中には、騙して悪いものを高く買わせる人もいたという。

浅所では大正の頃、沼館の方から、月に数回食用油を売りに来る人がいた。「あぶらー、あぶらー」と部落内を触れ回り、各家の女性が一升瓶を持って買いに出ていた。油売りは桶に油を入れており、瓶に漏斗を差し、桶から升で掬って油を注いでいた。油は1合単位で売られた。油を売る人は、月に何度か来ていた。同じ頃、夏に青森市野内鈴森から南蛮売りが来ていた。南蛮を粉にしたものを、小さな升のような入れ物に入れて売っていた。鈴森の南蛮は、やや大きいが辛すぎないと有名であった。売っている人は、南蛮だけでなくミカンの皮も入っていると説明していた。

また大正から昭和の初め頃、キセル直しが年に1度来ていた。キセル直しとは、キセルの竹で出来た軸の部分交換する人である。キセルは、1年経つ頃にはヤニが溜まってし

まうものであった。湯気が出てピーッと音の鳴る機械が、キセル直しが来た合図であった。キセル直しは2、3年で来なくなった。その理由は、キセルを使う刻みタバコより、紙タバコがよく吸われるようになったからではないかという。

昭和20年頃、秋になると毛布を売りにくる行商人がいた。羊毛で出来ているというので見せてもらおうと、中は明らかに綿だった。似たような毛布売りは3、4年の間、秋になると来ていたが、毎回違う人だった。

東滝の昭和14年生まれの女性が嫁に来た昭和34年頃、工藤という名の衣類の行商人が、沼館から車で来ていた。下着、前掛け、ズボンなどさまざまなものを売っていたが、高価な着物は持ってきていなかった。この女性は、欲しい衣類を頼んで持ってきてもらったことがある。また、その行商人が来ると、家に上げて商品を見せてもらったり、一緒に茶を飲んで話をしたりした。

昭和40年頃まで、沼館から樽屋が、小湊のハウセイドウという店から、樽や鍋、釜を直したり、刃物を研いだりする人が月に1度くらい来ていた。ハウセイドウは、現在でも小湊にある。

白砂では戦後、小湊から醤油売りが来ていた。醤油売りは大きな箱を背負っており、その中に醤油を入れ、一合枰で量って売っていた。

昭和40年頃まで、越中富山の薬売りが来ていた。この薬売りは、富山県から1年に1度ほど部落に来ていたが、特に来る時期が決まっているわけではなかった。各家に置き薬の箱を置き、来る度になくなった薬を補充し、お金をもらっていた。

東田沢では小湊から、月に2、3回くらい布や着る物を売りに来る人がいた。いつも同じ人が来るというわけではなかった。昭和40年頃まで、反物や衣服を売りに来る人たちがいた。風呂敷を背負って一軒一軒家を訪ねて回っていた。

富山の薬売りと呼ばれる人は、以前は富山県から来ていたが、現在は、野辺地町や青森市に住んでいる人が来る。この人たちは富山県から移住したと言われている。大正9年生まれの女性は、薬売りをマルサ、マルキ、マルヨなどのヤゴウで呼んでおり、苗字はよく知らない。女性の家には2種類の薬売りの伝票があり、それによれば松栄薬品と四十物仁寿堂の2軒が女性宅に来ていたことが分かる。

明治44年生まれの女性が小学校の頃、秋田から熊の胃や猿の頭を売りに来た人がいた。熊の胃は胃の悪い人に、猿の頭は頭痛に効くといった。

稲生では、茂浦や青森市久栗坂の方から、衣類を売りに来る人がいた。昭和30年頃に道路が整備されてからは、ライトバンや軽トラックのような車や、バイクで来るようになった。バイクで来る時は、手袋、長靴、ヤッケ、合羽などを売っていた。茂浦から来たのは、カネモリと呼ばれる男の人で、布や服を背負って歩いて来ていた。

浦田では、道路が整備される以前は、ショイコと呼ばれる物売りがやって来ていた。彼らは青森市浅虫から来ており、反物や小間物（櫛、簪、針、糸など）を売っていた。



茂浦のカネモリ（森商店の屋号）が、浦田までカスリなどの衣服を売りに来ていた。昭和 6 年生まれ女性は、その人から子どもの服を買って、正月にその新しい服を子どもに着せた。

小湊からおもちゃや服を売りにくる人がいた。しかし、昭和 30 年頃に茂浦と浦田の間の道路が整備されてからは、部落の人が買い物に行きやすくなったので、売りに来ることはなくなった。

茂浦では昭和 40 年頃まで、越中富山の置き薬の行商人が、1 年に 3 回ほど来ていた。行商人は、1 日では部落の家すべてを回りきれないので、オオヤケの家に泊まっていた。持って来る薬には風邪薬や胃薬があった。薬を入れた籠を何段にも重ね、それを風呂敷で包んで背負っていた。

昭和 50 年頃まで、服を売る行商人が来ていた。行商人は、服を大きな風呂敷に包み、背負って持って来た。1 ヶ月に 1 回程度の割合で来ており、売りものはほとんどが作業着だった。

#### 仲買人

昭和 30 年代まで、漁獲物や家畜、毛皮などの仲買人が、他所から定期的に各部落を訪れ、商売をしていた。

浅所では昭和 30 年代まで、バクロウと呼ばれる、馬の種つけや仲買を専門とする業者が来ていた。家の馬が年をとると、バクロウに新しい馬を持って来てもらい、お金を払って年をとった馬とバクッて（取り替えて）もらった。春になると、2 歳になった馬が小湊のマイチに出され、多くのバクロウがセリで馬を売り買いしていた。マイチは地区ごとに開催される日時が決まっていたが、その地区以外から持ち込まれたタビの馬でも、手数料を払えばマイチに参加することができた。上等の馬は軍馬御用となり、政府に買い取られた。マイチには 200 頭から 300 頭の馬が出たが、軍馬御用になるのは 5、6 頭で、普通の馬の 3 頭から 5 頭分となる 300 円くらいで買い取られた。大正 6 年生まれの男性は、バクロウは、口はうまいがずるく、カラヤミ（怠け者）で、読み書きのできない人が多いと言う。バクロウは、馬の年齢を正確に知る術を持っているとされるが、普通、馬は 15 歳になると年をとって使いものにならないとされているので、役場に出す書類では年齢を偽ることがあった。バクロウには読み書きのできる人が少ないので、この男性は、バクロウに頼まれて書類の偽造を手伝わされたことがあった。

小湊の松田精肉店は、「豚買い」と呼ばれており、定期的に部落に来て豚を買って行った。

東滝では昭和 30 年代まで、浅所に馬の売り買いを商売とするバクロウがいて、小湊で馬を買って来て東滝の各家に売りに来ていた。

また同じ頃、小湊から豚買いが来て、各家で育てた豚を買って行った。豚買いは、小湊で肉屋をしている松田という人だった。豚買いは秤で豚の目方を量り、それによって値段

を決めるので、昭和4年生まれの男性は、出来るだけ豚を重くしようと、豚買いが来る直前にたくさん餌を食べさせたという。

東田沢の大正11年生まれの男性は、40年ほど前まで農耕馬を飼っていた。50年ほど前まで、種馬を小湊から連れてきて交配させる人がいた。男性はその人に頼んで馬に種つけをしてもらい、子馬を産ませて育てた。耕耘機を購入して馬がなくなったとき、男性の父は馬を東通村のほうへ売った。

戦後しばらくの間、小湊から毛皮の仲買人が訪れ、部落の人が罫で捕ったタヌキやイタチの毛皮を買い取っていた。

浦田では昭和30年代まで、山口から徒歩で魚を買いに来る、仲買人の女性がいた。同じ女性がほぼ毎日のように来ており、買った魚は青森市に持って行って売っていたようである。

## 2 出稼ぎ

出稼ぎに行くことを、「タビに行く」、「ヤトイに行く」などと言う。

夏泊半島において出稼ぎが盛んになったのは、昭和10年以後のことで、ちょうど地先における主要な漁業であった、イワシの大謀網漁やタラの底建て網漁、ホタテの底曳き網漁が不漁になる時期と前後してのことである。地先漁業の不振により生計の維持が困難になった漁師の多くは、部落に人集めに来た仲介者の紹介で、遠方の漁場へ出稼ぎに出た。

漁の出稼ぎ先として多かった場所としては、比較的近距離のものとしては横浜町のタイ漁、むつ市大湊のイワシ・ニシン漁、脇野沢村のタラ漁、八戸市、北海道函館市のイカ釣り漁、北海道松前郡のニシン漁など、さらに遠方になると利尻島、礼文島、稚内市のニシン漁、樺太のサケマス漁、カムチャツカ半島のカニ漁などがあげられる。地図1は、漁業の出稼ぎの行き先として、聞き書きから確認できた場所を表わしたものである。

年間を通して出稼ぎに行き、正月にしか部落に帰らない者もいれば、部落内の生業が暇な時期にのみ出稼ぎを行う者もあった。船や田を所有していない家からは、特に早くから出稼ぎに行ったと言われる。出稼ぎには、大抵は個人で行くが、まれに夫婦、あるいは子どもを含めた家族総出で、年単位の長期にわたって行く場合もあった。また、出稼ぎに行くのは男性が主であるが、結婚前の女性が漁獲物の加工や漁場の飯炊き、あるいは愛知県や岐阜県などの紡績工場に出稼ぎに行く例もあった。

漁業の出稼ぎは、昭和30年前後から漁場の縮小、不漁などの理由からあまり見られなくなり、代わって東京都、大阪府、北海道などへの土木工事の出稼ぎが大部分を占めるようになった。

男性が出稼ぎで留守にしている家では、女性が田畑の仕事やテマとりを行って家を守り、山割りなどの部落の共同作業も担った。

出稼ぎに行った人が、出稼ぎ先に定住することはあまりなく、部落に帰って来ることがほとんどであったが、まれに次男以下が出稼ぎ先で婿となり結婚してその土地に残ったり、逆に嫁を連れ帰って来たりすることがあった。

以下には、個人の出稼ぎの事例を挙げる。

#### (1) 男性の出稼ぎ

##### ・漁業の出稼ぎ

【事例】浅所の大正6年生まれの男性は、昭和9年から12年まで、4月から8月の間、北千島にサケマス加工の出稼ぎに行った。出稼ぎに行った先では、秋田県や宮城県など他県から来た人たちも多くおり、こうした人たちは「タビ人<sup>マシ</sup>だからいいのばかりではない」が、一緒に働くうちに仲良くなった。仕事を見張っている人がカシの木の棒を持っていたことから、こっそりカシボウと呼んだり、ひっきりなしに行ったり来たりしなければならぬような忙しい日を、ノコを挽くときの刃の動きに見立てて「今日はノコビキだ」と言ったりと、仲間内だけで通じる言葉を言い合って楽しんだ。

また、同じく昭和9年から12年まで、9月から11月の間、北海道函館市か下北半島のイカ釣り漁の出稼ぎに行った。青森市久栗坂の親方の紹介で、その年によって函館市か下北半島のどちらかに行った。男性のような若い衆は親方の家か番屋に寝泊りした。魚場はヤマを見て覚えるので、馬のクツ（蹄鉄）に似ているからウマクツヤマとか、アブラメが獲れるからアブラメヤマというように、仲間内だけで通じるヤマの名前を付けて使った。他の船はかたきであり、どんなに親しい友達がいても、良い漁場を教えることはなかった。函館市では、下北半島と比べて給料は少し安いが食事はごちそうで、白いご飯に魚の煮つけなどのおかずがたくさん出された。下北半島では、給料は高いが食事は質素で、いつも麦が混じったご飯に大根の切干しだけだった。函館市では、スルメ1匹が8銭から10銭で、当時は10銭あればオヤキが20個買えた。北海道のイカ釣り場には、石川県のほうから来た船や人がたくさんいた。こうした人たちをノドッコ、ノドコ、オドコなどと呼んだ。

出稼ぎ先で一緒に働く者同士でケヤグになることはよくあった。ケヤグとは親友のことであり、海の上でのケヤグをヤウチという。道具の貸し借りをするような仲の者はもちろんだが、互いの名前も知らなくても、近くで漁をする船のこともヤウチと呼ぶこともある。それは、近くの船とはいざというときに互いに命を賭けて助け合うものだからである。「ヤウチいてあったか」とは、互いの無事を確認する言葉である。

昭和10年頃から、戦時中の中断を挟んで昭和30年頃まで、青森久栗坂の親方に雇われて、機関長として冬場に樺太や利尻島、礼文島と青森市間の魚の運搬を行っていた。船長も親方に雇われた人であったが、親方と船長はたいがい仲が悪いもので、「カラス鳴かねえ日はあっても親方と船頭喧嘩しねえ日はない」などと言われた。魚を青森市に運んで売るとき、タイやヒラメなど、珍しい魚があるとそれを親方に隠してこっそり売って、その

金で皆でオヤキを買って食べたりした。帰る時、親方は土産に魚を持たせてくれるが、量が少ないので皆「土産はかっぱらってももらえ」と言って獲った魚をこっそり自分の土産にしていた。

【事例】茂浦の大正5年生まれの男性は、昭和10年頃から、春から秋にかけて茂浦の親方のもとでイワシの建て網のヤトイをし、冬は横浜町でタイの建て網漁のヤトイをしたり、脇野沢村や青森市浅虫のタラの底建て網漁のヤトイをしたりしていた。タイの建て網漁は、日雇いで1日50銭、タラの底建て網漁は現物支給でタラをもらった。タラは1本11銭、子持ちだと50銭で、当時は50銭あれば、映画を見て鍋焼うどんを食べてダットサン（ハイヤー）で番屋に戻ってもお釣りが来た。

タイの建て網漁は、4月から11月に行われた。雇われ人はワケエモンと呼ばれ、1日50銭の給料をもらった。青森市からはチョウバと呼ばれる会計係も来ていたが、この男性は、「番屋の会計」といって、浜で獲れた魚を計算したり漁に参加する人数を計算したりする仕事を任されていた。

タラの底建て網漁は、12月に行われた。給料は現金で、漁獲高の4分がワケエモン、6分が親方の取り分となった。タラが1日に1000本獲れると大漁で、船に大漁旗を揚げ、親方からワケエモンに酒が振舞われた。これを千本ダラ祝いといった。タラが1日に4500本も獲れる日が、1週間くらい続いた年もあった。タラは1本11銭、卵の入ったタラだと50銭で、大漁の年だとワケエモンでも1ヶ月で300円くらい稼いだ。300円といえば、当時は分家が1軒建つというほどの大金であった。

#### ・土木工事の出稼ぎ

【事例】稲生の昭和5年生まれの男性は、戦後4、5年経ってから、4月から11月頃まで、北海道の釧路市、根室市、厚岸町に土方の出稼ぎに行った。中野に「頼む人」（出稼ぎ先を世話する人）がおり、その人が稲生まで来て、男性や部落内の人を連れて青森市に行き、そこから船で北海道に渡った。土方の親方は元漁師で、稲生で網をたてていた青森市の伊藤という親方と知り合いであったので、非常に良く面倒を見てもらった。仕事が忙しく、男性は毎年盆に家に帰ることができなかったが、その代わり、盆の時期には親方に服を作ってもらった。

#### （2）女性の出稼ぎ、テマとり

##### ・ 出稼ぎ

【事例】浅所の女性は、小湊にあった高等小学校に2年まで通い、その後5年間ほど、岐阜県にある大日本紡績工場で働くことが多かった。昭和7年生まれの女性の妹は、北海道野幌に畑仕事の出稼ぎに行き、そこで結婚した。女性が出稼ぎ先で結婚して帰ってこないことは少なくなかった。

【事例】東滝の大正5年生まれの女性は、小学校を卒業した後、数え14歳から15歳まで、千葉縣市川へ紡績の仕事をしに行った。お金が儲かるわけではなかったが、「よその人に仕えてみないと人にならない」という親の方針で行った。5銭でふかしたサツマイモが3本買える時代で、紡績の日当は24銭であった。女性は、絹糸の束を機械に通してさらに細くする仕事をした。

【事例】昭和3年生まれの女性の父親は、樺太に出稼ぎに行き、樺太にいた三沢市出身の親方と仲良くなった。親方は1ヶ月20円の給料を出すので、女性を子守に連れてきてくれないかと女性の父親に頼んだ。女性は新しい着物が欲しかったので子守に行くことにした。父親の出稼ぎが終わって一緒に帰る時、女性の給料は全て父親が貰ったが、父親に着物を買ってもらった。来年も来てくれないかと頼まれたが、女性は戦争が始まっていて危ないと思ったので断った。

【事例】大正3年生まれの女性は、数え17歳の時、外童子から嫁に来た。嫁に行く前、数え9歳から16歳までの間、北海道標津郡にいた。女性の一番上の兄が標津郡に開拓に行く際、自分の子どもの子守りをさせるために、女性を連れていったのである。女性は兄夫婦と畑を開墾して麦、ジャガイモなどを作り、それらを売って暮らした。この女性によると、外童子からは8軒が標津郡に開拓に行き、そのうち4軒は今も標津に住んでいる。

稲生の昭和13年生まれの女性は、昭和30年頃、北海道芽室町の農家に出稼ぎに行っていた。4月から12月まで働き、1ヶ月8000円ほどの給料が払われた。その農家では小豆などを作っていた。

#### ・テマとり

ここでのテマとりとは、魚貝類の加工、採掘工事、土木工事などの日雇い労働のことであり、テマドリ、デメントリとも言われる。漁の出稼ぎとは違い、毎日家に帰るので、女性が行くことが多かった。家族が多いと、小学校を出たばかりの子どもが行くこともあった。これらのことは、ホタテの養殖が始まる頃まで続いた。

### 3 移住

なんらかの理由でタビから来て、そのまま部落に定住するようになった事例、または部落からタビに出ていきタビ先に定住した事例が見られる。

【事例】タビから来た人が浅所に住み着いた後に、浅所の人の世話で嫁をもらうことがあった。浅所に住んでいた人が、いったん樺太や青森市浅虫などに移り住んだものの、その後再び部落に帰ってくることもあった。大正6年生まれの女性は、小学校3年生の時に北海道紋別郡雄武村のマゴババに引き取られ、18歳で浅所に帰ってきた。

【事例】東滝の昭和7年生まれ男性の両親は、戦時中に夫婦で樺太に渡った。東滝から樺

太に出稼ぎに行く人は多かったが、そのまま定住するのは家を継がない次男、三男であり、男性の父も次男であった。終戦後、男性の一家は東滝に戻って来た。

東田沢に来た富山から来た親方衆は、イワシの漁期の間だけ大島に建てた番屋に住んでいたが、彼らのうち船頭であった四十物という人が、その後野辺地町に定住して薬屋をしていた。東田沢にも、置き薬を置きに1年に2、3回来ていた。

【事例】大正9年生まれの女性の次兄は、下北の脇野沢村蛸田にタラ漁の出稼ぎに行き、その親方の娘と結婚して婿になり、家をたててもらった。

【事例】稲生には、現当主の祖父の代にタビから働きに来て、稲生の本家やオオヤケの世話になって家をたてて（分家して）もらい、そのまま部落に移住した家がある。

### 第3節 タビの受容

本節では、1、2節で述べてきた夏泊半島をめぐる生業とタビの諸相をもとに、半島がタビへと開けていく過程とタビを受容していく背景、さらに再びタビから半島へ向けて還元されたものを考察していく。

#### 1 家同士の共同

明治期以降、夏泊半島沿岸部の部落はいずれも、多様な生業の複合のなかで漁業をその生計の主に置いて成立してきた。豊富な水産資源を有する陸奥湾に面し、後背に平地の乏しい地理的条件は、人々の海への経済的な依存を大きくした。一方で、漁撈技術の未熟さや交通の未発達であることは、漁業海域を部落の地先の沿岸海域に限定することになった。陸奥湾の恵まれた漁業環境や地先への寄魚の存在は、かえって人々の地先を越えた外海への志向性を低くしていた側面もある。また陸上交通の未成達は、漁獲物の販路の確保を不十分にし、それゆえ必要以上の漁獲量の拡大を目指す欲求も強くはなかった。結果、夏泊半島における漁業の性格は、網、籠によって「寄り来るものを獲れる分だけ獲る」という、きわめて受け身的なものとなった。

部落の地先はいわば、部落の土地の延長上にあるものであり、そこには陸上と同様の社会的関係ないし規制が存在していたと考えられる。夏泊半島においては、農業の田植えや稲刈り、あるいは炭焼きなどの場面で、本分家やオヤコマキ（親戚）同士の共同労働や、労働力の貸し借りが顕著に見受けられるが、集団漁の場面においても、本分家関係、あるいは部落内の漁の共同組織であるクミなどの社会的関係が機能していた。当時、集団漁に使用するような船や網を所有しているのは親方や本家など一部の家に限られており、「本家親方親も同然」（浦田 男性 大正8年生まれ）などと言って、残りの家は経済的にも社会的にも、それらの家に従わなければ漁に参加できなかった。

こうした陸上の社会的関係の海への連続性は、個人の漁においても例外ではない。近くで漁をする船をヤウチと呼んで、「海でのケヤグ」として助け合ったり、良い漁場や魚の

情報を共通の知識として共有したりといったことは、漁業の場面において漁師同士の競争意識よりも部落における付き合いや仲間意識、同一性が、より優先されていたともいえる。本分家やオヤコマキは基本的に血縁関係であり、そこにはあらかじめある程度の序列があるが、クミはいわば地縁関係にあたり、そこに主導的役割を果たす親方とそれに従うその他大勢があることは、部落における社会的、経済的格差があきらかに存在し、それが特に集団漁の場面で顕著に示されていたといえる。ただし、こうした立場の格差は決して普遍的なものではなかった。本家やオオヤケと呼ばれてきた家が「財」を失ってその座から陥落することは珍しいことではなく、代わってその地位を得る家も当然現れる。昭和2年前後から登場した石油焼玉発動機船が各部落に導入され始めた当初には、どの部落においても、「オヤコマキも何もないような」というほどの激しい争議が起こっている。これは発動機船が従来とは比較にならないほどの漁獲をあげ、一方で海底を荒らすということでその使用の是非が問題になったのである。海は部落の共有地であり、海の資源も部落の共有財産であるという従来の考え方が当然と、新たな技術を積極的に受け入れ、より大きな利益を獲得しようという姿勢との衝突が発動機という新たな道具の導入期において、それまでの部落内での関係や地位とは別の枠組を形成しつつあった。多少の格差を内包しつつも、その中で「平等」な資源の分配を行なってきたかに見える血縁・地縁関係も、新たな技術や漁法の導入により常にそのあり方を変動させていく必要があった。

## 2 「タビから来た人」の影響

昭和4、5年に、富山県から東田沢、稲生、浦田、茂浦の各集落に、イワシの大謀網をたてる漁業経営者が相次いで進出した。彼ら「富山の親方衆」は、部落の人々から見るとまさに「タビから来た人」であり、「タビの人」「タビ人」などとも呼ばれた。

「富山の親方衆」の夏泊半島への出漁は、部落やそこに住む人たちに大きな影響を与えた。第一に、それまでなかった大謀網という大規模な集団漁の漁法をはじめとして、部落に新たな技術や知識をもたらしたことである。親方が連れて来た船頭の網の作り方や漁場での網のたて方といった漁撈技術、操船技術、その他漁に関するさまざまな知識の豊富さは、当時の部落の人とは比べ物にならなかった。これらの技術や知識は、富山の親方衆が夏泊半島に出漁して来なくなった後も、部落の人だけで大謀網漁の実施が可能となるほど定着した。技術や知識の享受という点では、富山からの出漁者に限らず、地先外での漁を行う際に見聞きする新たな漁法や漁具、津軽半島平舘村の造船技術などもまたタビの優れた部分として広く認識され、積極的に取り入れている。

第二に、イワシを大量に漁獲して加工したものを直接問屋に卸すことで、それまで部落の人にはあまりお金にならないと思われていたイワシの加工法と新たな販路を一般的な手法として開拓し、イワシの商品価値を上げた。それにより、「商品」としてより価値高い

ものを優先される発想がイワシの大規模漁をさらに活発化させた。

第三に、集団漁のなかにより明確で秩序だった規制を作り上げた。大規模な集団漁であるため、漁の参加者の中にも明確な役割分担が必要となり、その仕事内容や経験によって儲けの分配も変わる。そのため若者がこれらの集団漁に参加して一人前の分け前をもらうことには特別の意味が付加され、一人前の漁師としての条件のひとつとして挙げられるようになった。

第四に、富山の親方衆はその後部落の人々がタビへ流出していく過程において、その先導役とも言える機能を果たした。富山の親方衆のもたらした新しい技術や財力は、人々のタビへの関心を強めさせることとなり、また大謀網漁に参加する中で、青森市久栗坂の親方など後にタビの漁場への世話人（仲介者）の役割を担う人物との関係を築いていったのである。

イワシの大規模漁は富山の親方衆が現れなくなる年代と前後して不漁が続くようになり、イワシに限らず地先の海産資源の減少の中でタビは生計の維持のための重要な「場」として半島の人々にまなざされるようになった。富山の親方衆は夏泊半島の人々がタビの存在をより明確に認識し、そこに進出していく過渡期において半島とタビに介在し両者の橋わたしをする役割を担った。

### 3 タビへの進出

漁業出稼ぎのようなタビでの生業は、昭和 10 年代以降の地先漁業の衰退による生活基盤の弱さに端を発し、家の余剰労働力を有効に活用し生計を維持するための手段として、必要に迫られて選択された。そしてその背景には、半島とタビとを繋ぐさまざまな人脈を形成し、実際的なタビへの道筋をもつけ、また「地域」の人々にタビを意識させ、彼らのタビへの関心、憧れを育てることにもなった、「タビから来た人」と呼ばれる人たちの存在があった。

こうして選択されたタビはやがて半島においても一般的な選択技として認められていくが、その形は部落内においても均一な内容が見出されるものではなく、個人や家ごとの偏差が大きかった。タビの行き先やタビに行く時期には個人差が大きく、タビを主たる生業としてさまざまな場所を渡り歩き、年間を通して正月にしか部落に帰らない者もいれば、その他の生業の暇な時期にのみタビに行く者もあった。船や田を所有しない家は、比較的早くタビを選択し、経済的に大きく依存したことが多い。また、次男以下の男性がタビに行くことが多いとも言われ、余剰労働力の行き先としてのタビの存在もうかがえる。しかし同時に、タビは若者が「世間」を知り一人前と認められるための手段としても認識され、生活のためだけでなく積極的にタビへ向かう姿勢もまた表れた。



このようにして個人が体験したタビは、苦労したが有意義で楽しかった「経験」として肯定的に語られる傾向にある。実際その通りであったかということは別にして、タビでの「経験」は仲間内で話される中で傾向性やある種の規範意識を醸成していったと考えられる。つまりそれらの語りからは、タビにおいて評価される「個人」のあるべき姿が見出せるのである。タビは「地域」や家による規制からいったん離れ、自らの「世間」を広げ、「個人」の自由裁量を発揮しうる場であることが強調された。そしてそこで「個人」の評価基準となるのは、「個人」の才覚でいかに多くの儲けるか、そして悪環境や雇い主の意地の悪さに対抗していかにタビを楽しむかという点であった。タビは「個人」の才覚や自由裁量が求められ、評価される場として認識され、その「規範」が共有されたのである。

しかしタビの「経験」は語りの中だけにあるのではなく、個人が身につけた新たな技術や認識として実際に活用され、その後の夏泊半島における、タビに代わる新たな生業の選択や取り組みにも大きな影響を与えた。

#### 4 ホタテ養殖への特化

ホタテ養殖業の普及は、部落の生活に大きな変化をもたらした。第一に、部落の多くの男性が出稼ぎに行くことで生計を立てていたのが、ほんの数年で部落のほとんどの家がホタテ養殖漁業に転向したのである。部落は当然活気づいたし、経済的にも潤った。養殖が軌道に乗り始めた昭和 45 年頃には、民家が次々と「ホタテ御殿」と呼ばれる新築の家が変わっていった。船もそれまでの木造船から、プラスチック製のディーゼル船へ転換する家が急増した。

また、ホタテ養殖漁業は年間を通して作業があり非常に忙しいので、他の生業との兼業は難しくなり、他の漁業や稲作などを行なう家は急速に減少した。同時に、それまで海に出ることの少なかった女性も、ホタテ養殖漁業においては重要な労働力として船に乗り、男性と同等の作業を行なうようになり、仕事のバリエーションがなくなった代わりに、労働力の均質化が進んだ。

さらに出稼ぎ全盛期でさえ続いていた船まつり、船霊様の日などの海にかかわる信仰行事が行なわれなくなり、漁の禁忌・俗信も、親から子へ必要な知識として伝承されることは少なくなった。これはそれまでの漁業のように身の危険や博打的要素を感じられなくなったため、そうした行事や伝承の切迫性がなくなってきたからと考えられる。そして、かつては漁師の一人前の条件としてその習得が求められた、自然知識やヤマミなどの民俗技術もあまり重要視されなくなり、新しい世代に継承されなくなったのも、レーダーなどの新たな技術が導入された影響はもちろんのこと、養殖業においてはそうした知識や技術が必要とされる場面がほとんどなかったからであろう。

しかしこうした生業の質の変化を余儀なくされていく中にも、それまでの生業、あるいは

はタビでの「経験」がさまざまな形で生かされている。ホタテの養殖という新たな生業の開発には、タビの経験者のもたらした技術が大きな位置を占めた。またいち早く新たな生業を取り入れる姿勢、少しでも多くの利益を得るためのさまざまな工夫やこころみには、タビの経験によって培われた、「個人」の才覚が重視される新たな認識が積極的にあらわれた。ホタテの養殖という生業の普及で、夏泊半島における生業に関わるタビは急速に消えていったが、タビの「経験」はさまざまなかたちで「個人」や地域の生業変容を支えたといえる。

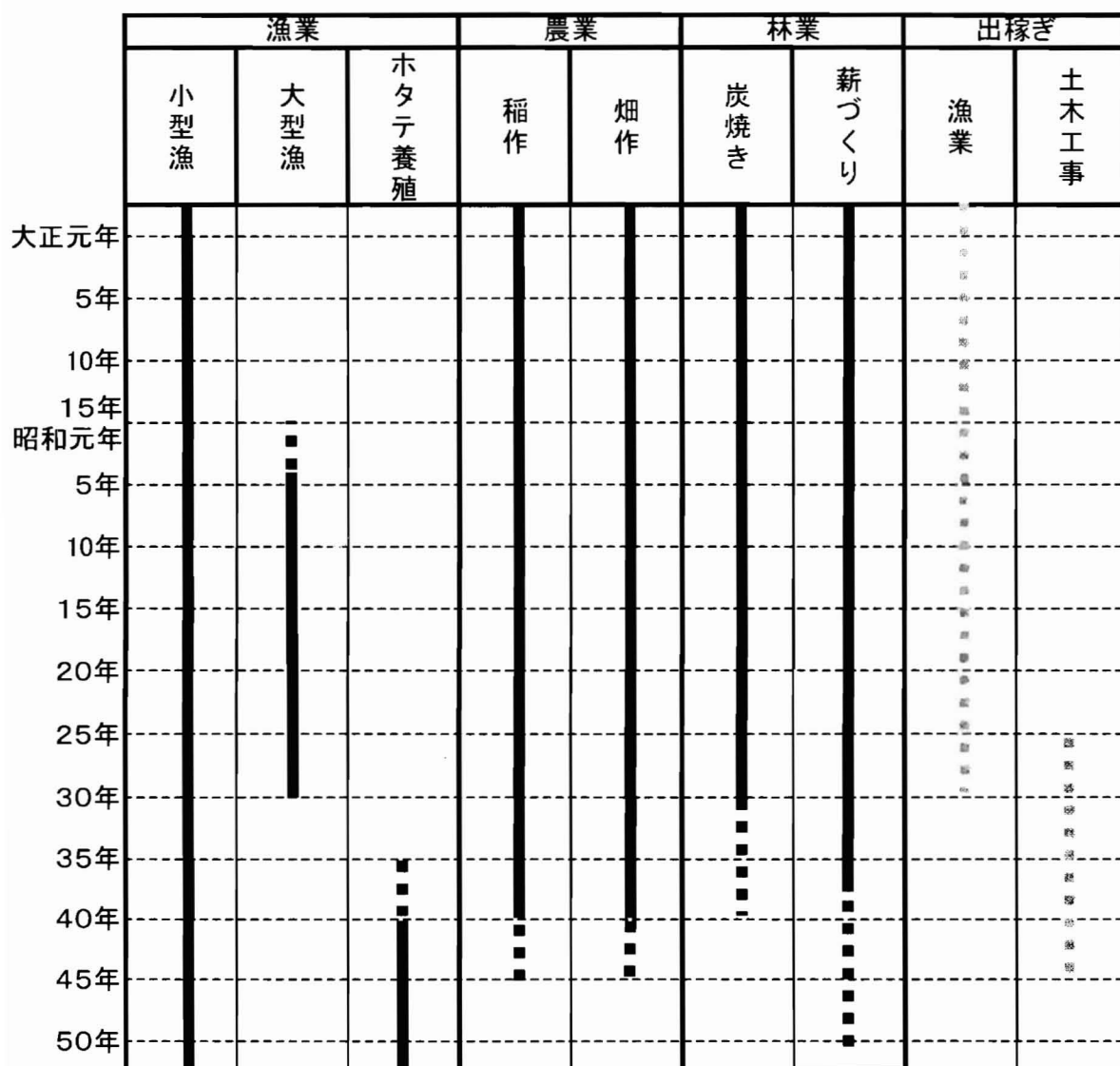
#### 注

1. 本調査の一部は、弘前大学宗教学民俗学実習の調査実習によるものであり、その成果は小林亜希子「生業」（弘前大学宗教学民俗学実習室他編『夏泊半島の宗教と民俗』平成15年 弘前大学人文学部宗教学研究室・民俗学研究室）、土岐奈々絵・小林亜希子「なりわい」（弘前大学人文学部宗教学民俗学実習履修学生編『夏泊半島における宗教民俗誌』平成17年 弘前大学人文学部宗教学研究室・民俗学研究室）にまとめられている。
2. 前掲注1『夏泊半島における宗教民俗誌』84頁
3. 前掲注2 93頁
4. 前掲注2 115頁

#### 《参考文献》

- ・青森県立郷土館編『浦田の民俗』昭和56年 青森県立郷土館
- ・青森県女性のあゆみとくらし研究会編『津軽漁村における女性の生活誌』平成15年 青森県男女共同参画センター
- ・青森県立郷土館編・発行『浦田の民俗』昭和56年
- ・岡本信男編著『富山県漁村風土記』昭和53年 水産社
- ・鬼柳恵照『平内町史』昭和61年 津軽書房
- ・小林亜希子「生業のなかのイエと個人―陸奥湾岸漁村の女性の生活誌から―」（青森県女性のあゆみとくらし研究会編『青森県女性のあゆみとくらし学習会報告書』平成16年 青森県男女共同参画センター）
- ・小林亜希子「家の生業選択と労働力―夏泊半島沿岸部漁村における生業の複合から―」（青森県民俗の会編『青森県の民俗』第5号 平成17年）
- ・弘前大学人文学部宗教学民俗学実習履修学生他編『夏泊半島の宗教と民俗』平成15年 弘前大学人文学部宗教学研究室・民俗学研究室
- ・弘前大学人文学部宗教学民俗学実習履修学生編『夏泊半島における宗教民俗誌』平成17年 弘前大学人文学部宗教学研究室・民俗学研究室
- ・平内町役場編『平内町史』上 昭和五六年 平内町

表1 夏泊半島沿岸部における主な生業の年代別変遷



■■■■■■■■ 聞き書きによって確認できる年代を表わす  
 ■■■■■■■■ 開始年代、終了年代など不明な年代を表わす  
 ○○○○○○○○ 個人の差が大きいものを表わす

表2 夏泊半島沿岸部における漁法の年代別変遷

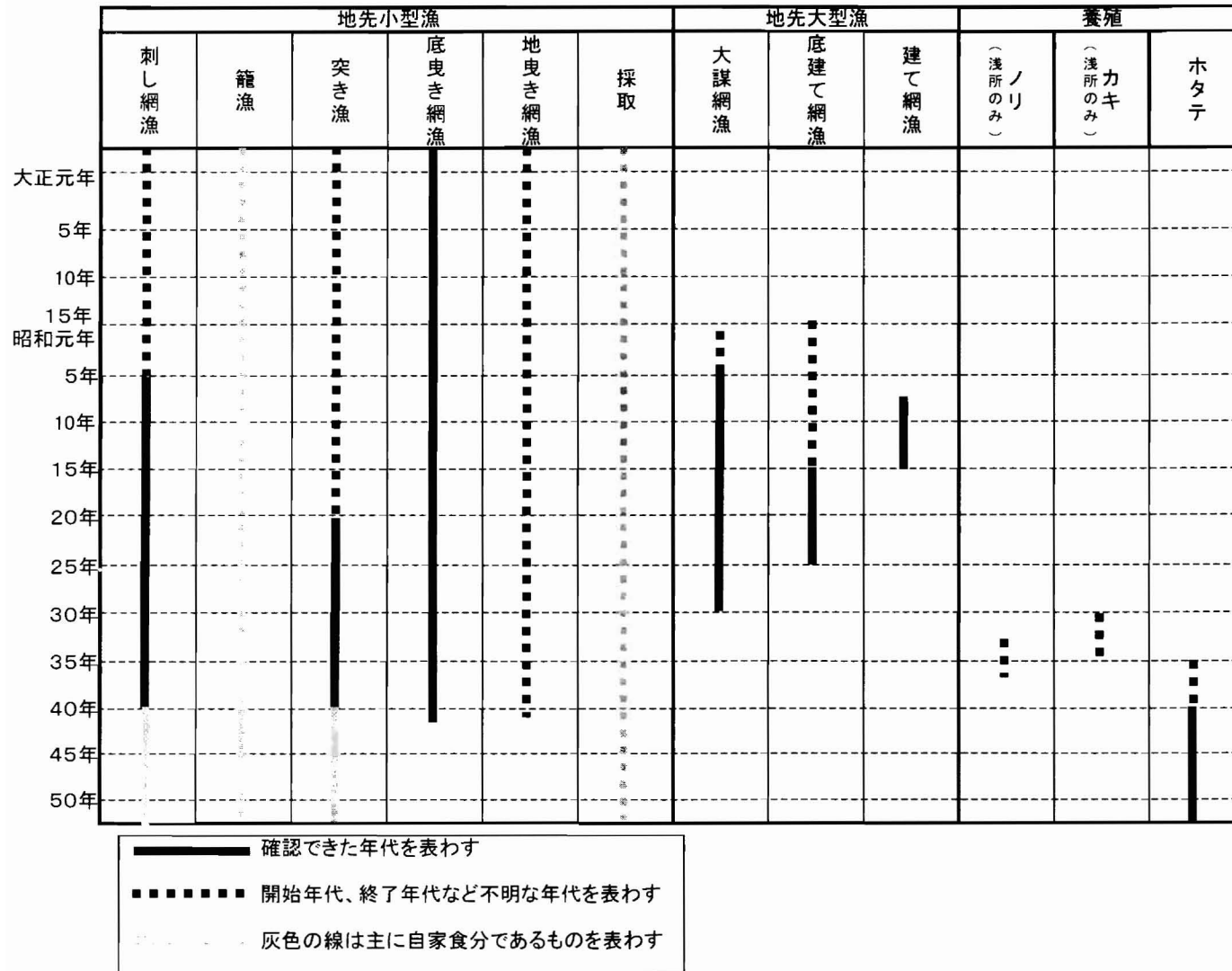


表3 夏泊半島沿岸部における1年間の生業歴

